『吉原伊勢物語』の改竄に込められた意図

松浦恵子

一　はじめに

従来、遊女評判記は、西鶴作品の成立との関わりにおいて論じられることの多かった分野である。『好色一代男』・『諸艶大鑑』は多くの遊女を素材としているため、遊女評判記はしばしば西鶴作品と比較された。西鶴作品に登場する遊女が実在したのか、また、西鶴が現実の遊女を素材としながらどれほど人間性の描写を行っていたのかを探るためである。

遊女評判記は、これらの問題を解明する有効な資料として用いられてきた。近年では、西鶴がどのように遊女評判記の写実的な描写の姿勢を取り入れ、かつ遊女評判記を超えて『好色一代男』を生み出したのかを解明するためには、浮世草子発生以前の文芸として遊女評判記を検討する必要があると考えられるようになってきている。しかし、現状では、浮世草子発生以前の文芸状況を解き明かすという視点を持って本格的に遊女評判記に取り組む研究は、殆どなされていない。

このような研究状況のなかで、遊女評判記の全体の流れを概観し、『好色一代男』出現の可能性を探った唯一の成果が、中野三敏氏の「遊女評判記研究――西鶴文学の一基盤――」（『近世文芸』八号、昭和三十八年十一月）である。氏は遊女評判記を「外的なもの」（文体や題材）と「内的なもの」（遊興論）とに分け、それぞれについて明暦期以前、寛文期、延宝期と時代を追って、その発展的様相を明らかにされた。氏の試みは、まさに遊女評判記を西鶴作品成立以前の文芸として捉えようとするものである。

本稿における筆者の問題意識は、中野氏の上げられた成果をもとに、遊女評判記は西鶴登場以前において、どのような文芸であったのかを解明しようとするところにある。

『吉原伊勢物語』は、これまで殆ど研究の俎上に載せられること

のなかった作品である（注1）。遊女評判記の歴史を通観すると、明暦期以前は上方物が主流であったが、寛文期に入ってからは江戸物の隆盛が目立ってくる（注2）。今回『吉原伊勢物語』を取り上げるのは、この作品が、評判記の主流が江戸物に移っていくまさにその時期に刊行された作品であること、それまで主流であった上方の評判記だったものが江戸物として改変されたという経緯をもつ作品であることの二点から、寛文・延宝期の江戸物評判記の一端を明らかにするのに適した作品なのではないかと考えたからである。江戸物評判記が、先進地であった上方の評判記をどのように取り入れていったのか、その一例を示すことを目的として、『吉原伊勢物語』を検討する。

二　上下巻の構成と入木による改竄跡

『吉原伊勢物語』は寛文の末から延宝のはじめにかけて刊行されたと考えられている。伝本は天理図書館蔵本一本を数えるのみで、非常に稀少な書である。大正八年に珍書保存会から謄写版の複製本が出版されている（注3）が、発行年の古さや印刷部数から考えると、現在誰もが目にすることのできる作品であるとは到底言えない。遊女評判記の研究史においても殆ど言及されることがなかった。

近年、丹羽謙二氏の「天理図書館蔵遊女評判記・細見目録稿（下）」（天理図書館編『ビブリア』一〇九号、平成十年五月）において、書誌的情報が初めて公にされた。大略はこの稿によって明らかであるが、この書の書誌は複雑で、しかも書誌的な特色が内容に深く関わっているため、ここで改めて確認しておきたい。

丹羽氏の作成された書誌の中で特に重要なのは、特記事項としてあげられている、旧蔵者柳亭種彦の識語である。次に上下巻の識語を掲げる。上巻識語はすでに丹羽氏によって翻字されているが、書物の素性を明らかにする上で欠かせない情報であるため、改めてここに記す。書物の来歴に関する箇所には、私に傍線を付した。

（上巻識語）

文政二壬午春三月十日上ノ巻ヲ得テ　片枝は霞かくれか伊勢桜ト云寛文調ノ句ヲシテ書ツケオキシガ十一年ヲ経テ天保壬辰春正月十四日下ノ巻ヲ得テ全本トナル

延宝ノ写本箕山カ著シシ色道大鑑ノ引書ニをかし男トアルハ此冊子也　元禄五年ノ書目録ニ吉原伊勢物かたり二冊ト載タリ

寛文二年ノ刊行今天保三年ニ至テ百七十一年ナリ

天保壬辰正月念一日　柳亭種彦記

（下巻識語）

上ニ記シシ如ク上下二度ニ取合セテ全本トナリシ也

案ニ下ノ巻ハ寛文二年ノ刊行刻摺タル物ナリ
上ノ巻ハ寛文末頃家号遊女ノ名ノ類ヲ当時流行ニ改メ夫彼入ル木シテ摺タル物ナリ
初丁オモテさんちや町トアルさんちやノ四字入レ木ニテ原版ニハあげ屋町トアリシナルベシ其余オシテ知ルベシ

この識語をもとに、書名、刊行年について、今一度整理しておく。

上下の識語双方に記されているが、この書物は、上下巻がそれぞれ時を異にして種彦の所蔵するところとなった。元来の題簽は失われており、内題、柱刻もないため、書名は不明である。下巻については、内容が『伊勢物語』の遊里版パロディであること、舞台を大坂新町遊郭としていることから、種彦は『色道大鏡』の凡例にあげられている『をかし男』であろうと推定した。

一方、上巻には、「すみ町」「京町」など、江戸吉原の町名や遊女名、抱え主の名を、入木によって改めている例を数多く見出すことができる。これらの入木跡をもとに、種彦は、上巻は『をかし男』の舞台を吉原に移して固有名詞を改竄したものであり、元禄五年の書目録に見られる『吉原伊勢物語』とはこの書物を指すと考えたようだ。

固有名詞の改竄については、注目すべき事実が石川巌氏によって指摘されている。種彦の識語では触れられていないが、本書上巻には、本来下巻にあるべき一丁が、誤って差し込まれている。同じ丁が下巻にもあり、この重複した丁によって、改竄の前後の様子を僅かながら伺うことができる。この重複丁について、石川氏は次のように述べた（注4）。

同（下巻十七丁目――引用者注）頁表五行目に、原刻には「みむろの観音」とありしを、再刻本には「浅草観音」と改めたる抔頗る乱暴なる改竄を敢てせり。斯の種の例は他にも幾多あらんと推せらる。
（句読点引用者補）

さて、改竄後の上巻の書名について、種彦は元禄の書目録をもとに判断したわけだが、現存している江戸時代の書籍目録によれば、『吉原伊勢物語』の所載がある最も早い目録は、「延宝三年刊新増書籍目録」の天和三年改修版（注5）である。これは延宝三年に初めて江戸の書肆が共同出版したものを、同版木を用いて増補改編した目録である。種彦は元禄の書籍目録をひいているが、江戸で販売されていた時期は、天和三年までさかのぼらせることができる。

刊行年については、下巻に「寛文二年」の刊記があり、従来この年の刊行であるとされてきた。しかし現存本は上下巻ともに寛文二年の初印本ではない。下巻には数箇所、入木の施された跡が見られ

るからである。印面の状態は上巻より良好である。従って、上巻よりは早く修訂の上、印刷されたと考えてよいだろう。上巻については、本文中に登場する遊女名から、野間光辰氏や小野晋氏によって推定されてきた（注6）。以下に寛文から延宝期に刊行された『讃嘲記時之太鼓』（注7）・『吉原大全新鑑』（注8）・『吉原よぶこ鳥』（注9）・『吉原こまざらい』（注10）・『吉原六方』（注11）・『吉原袖かゞみ』（注12）・『吉原天秤』（注13）・『吉原大雑書』（注14）の各評判記にあげられている遊女名と、『吉原伊勢物語』上巻に登場する遊女の名の重複を、表1に示す。

表1

刊行年	書名	登場遊女数	『吉原伊勢物語』との重複遊女数	『吉原伊勢物語』との重複比率(%)
寛文4	讃嘲記時之太鼓	36	5	18.5
寛文6	吉原大全新鑑	125	7	25.9
寛文8	吉原よぶこ鳥	41	5	18.5
〃	吉原こまざらい	36	4	14.8
〃	吉原六方	14	4	14.8
寛文10	吉原袖かゞみ(再刻)	87	12	44.4
延宝元	吉原天秤	130	15	55.5
延宝3	吉原大雑書	134	15	55.5

この表にあるように、寛文十年から延宝三年頃にかけて、『吉原伊勢物語』上巻と、その他の評判記類にあげられる遊女名の重複率が高くなっている点から、従来通り、寛文末期から延宝初期に刷られた修訂本であるとの説を踏襲することに問題はないと思われる。

三　江戸物への改変によって生じた変化

以上のように、天理図書館蔵『吉原伊勢物語』は、上下巻で書名も刊行年も異なるものを取り合わせた書物である。従って、内容の検討において、上下巻を同様に取り扱うことは適当ではない。そこで今回は『吉原伊勢物語』上巻（以下「上巻」と略）に限定して、検討の対象とする。

前章で述べたように、上巻には多数の入木跡が存在し、大坂の評判記であったものが江戸物に改変された痕跡が明確にわかる。この江戸物への改変について、かつて暉峻康隆氏は「初期遊女評判記研究」で次のように述べた（『西鶴研究ノート』〈中央公論社、昭和二十八年〉所収）。

「をかし男」はともかく新町現在で書いてゐるのだから、まだしも評判記的なニュースヴァリューがあったであらうが、それを内容はほとんどそのまま、わづかに遊女名を彫改めたくらゐで「吉原物」と銘打って出版したといふことは、素材の魅力を利用した大衆読物の提供と考へるよりしかたがあるまい。

暉峻氏の論の主眼は、「大衆読物の提供」という、この作品の意義を主張するところにあったが、吉原物への改竄の過程で「評判記的なニュースヴァリュー」がどのように失われたか、又活かされたかという点については全く検討がなされていない。そこで、上巻に見られる入木の跡を辿っていくことにより、大坂の遊女評判記が江戸吉原の評判記に改変された際、どのような性質の変化が起こったのか、その様相を明らかにする。具体的には、江戸物の遊女評判記として、江戸の遊女の実態を忠実に写そうとする意識が働いていたのかという点について検討していく。

四　遊女名への入木

上巻に収められた全四十八段中には、二十七名の遊女が登場する。大坂新町の評判記から江戸吉原の評判記に改変された際に、遊女名は入木によって彫り改められていると先述したが、すべての遊女名に入木が施されているわけではない。そこで全二十七名の遊女を、次の表2のように、入木の施されているものとそうでないものに分類した。更にそれらを、表1で掲げた八点の吉原物評判記類と照らし合わせ、他の評判記類の記述から、上巻に登場する遊女の像が他の評判記の記述と重ね合わせて読むことが可能かどうか調査した。

まず、入木の施された遊女十九名について検討する。

表1にあげた江戸の他評判記類では名前のあがってこない五名のうち、「むらさき」・「さくはな」については、『色道大鏡』巻之十一「人名部」に、遊女につけられる名であるとして記載がある(注15)。「さくはな」については、京都島原の遊女として巻之十六「道統譜」に名前が見られることと、上巻第二十九段の内容そのものから、遊女の名を示していると思われるが、江戸の遊女として存在したとする資料を見出せない。「るいのすけ」は『色道大鏡』巻

表2

入木	江戸の他評判記に名あり	他評判記の評判を取り入れている	西尾(第15段)はつ山(第19段)きさらぎ(第21段)やちよ(第37段)高尾(第48段)	こふじ(第2段)明石(第9段)	7名
		他評判記の評判と合致せず	夕きり(第3段)かりう(第10段)金太夫(第12段)ふじ岡(第14段)きんさく(第18段)まつしま(第26段)うきふね(第33段)		7名
					14名
	江戸の他評判記に名なし		市野(第2段)むらさき(第7段)るいのすけ(第23段)うきしま・さくはな(第29段)		5名
					19名
非入木	江戸の他評判記に名あり		空蝉(第3段)八橋(第9段)あはぢ(第25段)玉かづら(第36段)		4名
	江戸の他評判記に名なし		長嶋(第22段)たんか(第42段)花鳥(第43段)野風(第45段)		4名
					8名
					27名

之十一に「禿名」として記されてあり、また江戸の他評判記には名が出てこない。しかし上巻第二十三段の内容からは、この名が遊女以外を指しているとは考えにくいので、本稿においても遊女名であると判断しておく。「市野」・「うきしま」は、延宝八年刊行の『吉原人たばね』に名があるが、上巻が修訂の上刷られたのは延宝初期であると考えると、この作品を資料として用いるのは適当ではない。この項目については、他評判記と重ね合わせて読むための条件が揃っていないので、検討を保留せざるを得ない。

江戸の他評判記に名前のあがっている十四名については、他評判記の記述を上巻に表されている状況に重ね合わせて読むことが可能か、という点について検討する。果たして上巻の改竄は、時好性をもつ評判記として妥当なものであったのか。

十四名のうち、他評判記の記述を重ね合わせても無理がないのは、表2の「他評判記の評判を取り入れている」の項目に配される七名である。ここでは実際に、上巻と他評判記をつきあわせてみる。原文には句点のみが付されているが、翻字の際には私に読点に置き換え、また補った。なお上巻本文中に付した傍線は、入木の跡を示している。

おかし男かねつかはしける、女良のかたにこもとてなるを、あひしりたりける。ほどなくをくへゆかんとおもひける折ふしに、女郎りはつものなればめにはみゆれども、男あるかほゝしてはなさむといひこしければ、女郎

東路の余所にも君はなりゆかんさすがにめにはみゆるものなり

とよみやりければ、男返し

東路へ行とみたてゝふる事ははつ山殿の気のはやみなり

と読ける は、また男はなさむとおもひける。（上巻第十九段）

この第十九段は、男がみちのくへ行こうとしていることを察したはつ山が、機先を制して「私を捨てるつもりなのでしょう、わかっているわよ」と、男を責める歌を詠みかけるが、男ははつ山の挑発には乗らない。これは些細なことでわざといさかいを起こし、相手を手玉にとろうという、遊女の手管なのである。男は手管であることを承知の上で歌を詠み返している。

遊女はつ山の評判としては、寛文八年刊の『吉原よぶこ鳥』に次のように記されている。

よききりやうなり。もっとも、ひさしく公儀をもいたされ候へば、此みちに御鍛錬には御座あるべく候へども、まことに、人々の申ごとく、ちとうかべすぎ給ふやうにて目にたち候。（下略）

「此みちに御鍛錬」とは、客をつなぎとめておく遊女としての手

腕が優れているという意味である。あとの「ちとうかべすぎ給ふやうにて」の「うかぶ」という語については、明暦二年刊の『まさりくさ』に用例がある。

面躰、かどだちて、かほ、けんそにみゆ、利発者なり。されど、下輩の者にばかりなれもまれたる者にて、あて成所なし。座敷つき、うかべたるやうなれども、はや口にて、詞そそりたり、いやしめ也。いはゞはたご屋の女のごとし。（下略）　（傍線引用者）

この用例では、上巻にも見られる「利発者」という語が、「うかべたるやう」という語と共に用いられていることに注目したい。『まさりくさ』において描出されているのは、才気はあっても品はあまりよいといえない遊女の姿である。「うかぶ」の語が意味するところは、「するべきことをよくわかっていて、手慣れている」、又は「目はしがきく」ということであろう。つまり、はつ山は客あしらいのうまい遊女であるが、多少目はしがききすぎて、かえって鼻につくきらいがあるというのである。上巻第十九段は、他評判記のはつ山についての記述を、具体的な客との手管合戦の場に重ね合わせて読むことのできる一段であるといえる。

もう一例あげてみよう。

おかし男、色このみなりける上郎にあひにけり。うらじとみなやおもひけん

我ならで下ひもとくなやちよどのうる日をまたぬ君にはありとも

返し

ふたりしてむすびしひもをひとりしてあひ見るまではとかじとはおもふ

（上巻第三十七段）

遊女やちよは、角町喜右衛門の抱える遊女として『吉原天秤』に名が見える。また、角町喜兵衛の抱えが『吉原袖かゞみ』に、新町伊左衛門の抱えが『吉原大全新鑑』と『吉原こまざらい』に登場する。『吉原大雑書』においては、やちよという名の遊女は二名挙げられており、新町久右衛門と角町長右衛門にそれぞれ抱えられている。

上巻の記述からは、やちよが色好みの遊女であることがうかがえる。ここにあらわされている遊女像は、『吉原天秤』にみられるやちよ像との共通点を有する。

めんてい大かたなり。どこやらあいきやうありて、いとしらし。目もとよし。ざしき、心だて、にくげなし。とこのうち初からこちしだい也。

（傍線引用者）

初会では帯を解かないというしきたりはあっても、それは建前だけで、遊女によっては初会から客の求めに応じることもある。やちよは『吉原天秤』に「初からこちしだい也」とあるように、働きかけ次第では初会からでも客の意のままになるというのである。

上巻のやちよは「うる日をまたぬ」といわれるように、絶えずさまざまな客に揚げられている遊女である。遊女という立場上、特定の男にしか帯を解かぬというわけにはいかないのだが、それでも男に「我ならで下ひもとくな」と言わせてしまうやちよの色好みは、『吉原天秤』に表された、すぐに客の意のままになるやちよの姿と重ね合わせることができる。

同じ項の第二段は、遊女こふじに対する「其人かたちよりは心なんまさりたりける」という表現に、『吉原天秤』の「めんてい大かた、色少しくろし、きだてにくからず」や、『吉原袖かゞみ』の「色きわめてくろし」という評価とのつながりを見出すことができる。第九段に登場する明石は、冷やかし客から「おもいやればかぎりもなく、久しくも居にけるかな」と嘲られる遊女である。『袖かゞみ』によると、この遊女は遊里では年増であるとみられており、上巻における客の言葉は、遊里暮らしの長い明石への冷笑と理解できる。第十五段の西尾は、「なさかたつれども心かはるべき女郎ともあらずみへければ」と、悪評がたつのもおそれない情深い遊女であるとしている。これは『袖かゞみ』において「おちぞうの化身といふなさけふかき君と見えたり」という評からも思い浮かべる事のできる姿である。第二十一段では遊女きさらぎのなじみ客が、「ふるらんと思ふ心をうたがひてはなすより銭へるぞかなしき」と、会えばそばから金が消えていくのを嘆いている様子が描かれる。『天秤』における「さい〳〵のむしんにこまると、おてきのうわさじや」という、金のかかる遊女だという評判をあてはめることのできる段である。第四十八段に登場する高尾は、『讃嘲記時之太鼓』では「をのずから、太夫にそなわりたる心ざま、つくろふわざすこしもなく」、『袖かゞみ』においては「名過たり」、「大事の名、中絶すべし」などと酷評されている。『袖かゞみ』にはこれに続けて「ふりかゝりにもうり、あるひはやくそくをもよるひるのかまひもなく」とあり、このことから、寛文期の三代目高尾は全盛を誇るような状態ではなかったことがうかがえる。上巻においては、「高尾の待ける時はゆかで」という、参会の約束さえ反故にされて侮られる様子を、『袖かゞみ』の記述と重ね合わせることができる。

五　他評判記と合致しない遊女名

表2にある「江戸の他評判記に名あり」の中のもう一つの項目、「他評判記の評判と合致せず」についてであるが、まずこの分類の定義を説明せねばならない。

上巻には、遊女についての情報の断片が記されている。たとえば

第三段には遊女夕ぎりが「新町の太夫である」ということ、第十段かりうは「炭町のこうし」、第十四段ふじ岡は「三浦」の抱えであること、第二十六段まつしまは「炭町たてだし平右」の抱えであることが示されている。しかし、他評判記においては、同名の遊女があげられていても、抱え主や住んでいる町名が上巻とは一致していない。

また、第十二段金太夫、第三十三段うきふねについては、上巻の本文から遊女の特徴が読み取れない。第十八段の場合は、本文中の「歌よむ人なりければ」という記述が、この段に登場するきんさくという遊女の唯一の特徴なのだが、他評判記のきんさくの評判に、歌をよくよむという情報を記したものがない。第十二段、第三十三段、第十八段はいずれも、上巻から得られる手がかりが不十分なため、他評判記の記述との共通点を見いだせない。

「他評判記の評判と合致しない」という分類には、以上のように、大きく二つの場合を含めている。

六　入木の施されていない遊女名

さて、上巻には、遊女名に入木の施されていない段も存在している。

表2において「非入木」の項に配される八名の遊女名は、『吉原伊勢物語』として修訂刊行される前と変わっていない。つまり、この八名についての記述は大坂新町の遊女についての記述である筈である。

このことを確認するために、八名の遊女を、表2では、江戸の他評判記に名があげられているものとそうでないものに分類した。「江戸の他評判記に名なし」の項目に配される遊女は、大坂の遊女としての記述である筈なので、修訂前の寛文二年頃大坂において認識されていたそれぞれの遊女の評判と比較することにより、上巻が遊女の情報をどのように扱ったのかを確認できることになる。

大坂新町を対象にした遊女評判記は、寛永期から延宝末にかけて五作品しか残存していない。しかも寛文から延宝初期にかけての評判記で現存するものは江戸物ばかりで、大坂物となると、『をかし男』、つまり上巻と取り合わせてある下巻しか確認されていない。しかし同名の遊女は『をかし男』下巻には登場していないため、比較は不可能である。従って、上巻に最も近い大坂物は、明暦二年刊の『まさりくさ』までさかのぼることとなる。修訂前に『をかし男』の上巻として刊行されたのは寛文二年頃、明暦二年の『まさりくさ』との隔たりは六年である。

上巻の第四十三段花鳥を例として、『まさりくさ』との比較を行ってみる。

おかし花鳥の君と申す女郎おはしましけり。其女郎を有男いと

かはゆくおもひ入、ちいんしてかよひけるを、さるさがなき人、なじみぬる中をわるざまにいひたつるを聞付て、うらみて文をやるとて、歌をかきて

おとに聞中よきさまのあまたあればなをたのまれぬおもひぶりかな

といへり。此女郎きげんをとりて

うき名たつ人のうはさは是非ぞなきちいんあまたをうとまれぬれば

くぜつなる男かへし

ちいんを、き人の名さかの猶た、んはなする中にくぜつたえねば

額の疵、以外めにたつ、面躰、しほらしき所もあれど、傾城のやうにあらぬかほかたち也、おいとなどと。いひそう成ものか。姿はよし、心なる程かしこし、気だて、物やはらかにあれど、又ぬからぬ所は、男をも、よくしつぽりと。あひしらふものなり

（『まさりくさ』花鳥）（傍線引用者）

なじみ客の多さに嫉妬する客に対し、花鳥は「ちいんがたくさんいるとあなたがいやがるから、他のお客がねたんでいろいろ言うのはしかたのないことですよ」という意の歌を返す。これは「他の客のことがおろそかになるくらい、あなたのことを大事にしているのですよ」ということを暗に伝え、男のきげんをとりながらやんわりとなだめようとする、手管の歌である。上巻における花鳥の姿は、『まさりくさ』の記述が具体化されたものとみることが可能である。

この段の他、第四十五段は、登場する野風という遊女が「うれがたき夏の日ぐらし待ぬれてよぶ人もなきものぞかなしき」と売れない格子の中で歌を詠んでいる様子が、「扨も〳〵いや成女也」、「うれへめきたる事、葬礼のあとの。しにやを。みるやう也」とこきおろしている『まさりくさ』の記述からの影響を考えることができる。

その他、江戸の他評判記に名のあがってこない遊女のうち、第二十二段長嶋と第四十二段たんかは『まさりくさ』ではとりあげられておらず、大坂ではどのような評判であったのかを明らかにできない。しかし四名中二名の遊女についての記述に、大坂での評判の影響がみられること、そして何よりもこれらの遊女名が入木ではなく、延宝初期までの江戸の評判記類にはみられない名であることから、上巻が江戸の評判記として改変された際に、延宝初期当時の吉原の現実を忠実に写していたわけでなかったことは断言できる。これらの記述は完全に大坂新町現在のものである。江戸物への改変にあたって、入木を施してある段についてはそれなりに江戸の評判記としての情報を備えようとする意識があったことが認められるが、

上巻には、そのような意識の欠けた部分も見受けられる。

七　内容から選択された遊女名

更に、「非入木」の項にある「江戸の評判記に名あり」というもう一つの項目については、江戸の他評判記に記されている遊女像と、『吉原伊勢物語』上巻中の遊女像が一致するかどうかを検討する。

『吉原伊勢物語』上巻第四段

むかし、京町みうらうち空蟬といふ君おはしましけり。いづかたよりともなく、かよふ人有けり。かれを、まぶにはあらで、心ざしふかゝりけるゆへ、折々又まひけるに弥生の廿日あまりに、ふりよにかくれにけり。行所しれど、人の行かよふべき所にもあらざりければ、いきて立て見、のぞいてみ、みれど君に似るべくもあらず。うちなきてふるびたるこうしのもとに、月のいづるまでたてりて、君をこいてよめる

君やあらぬ宿やむかしのやどならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、なくなくかへりにけり。

（上巻第四段）

「行所しれど、人の行かよふべき所にもあらざりければ」とあることから、空蟬という遊女が突然姿を消した理由としては、身請けされて人の妻となったことが考えられる。

「京町みうらうち」の空蟬については、『吉原天秤』に評判がみられるが、『天秤』に載っている空蟬は出世したばかりの新造で、身請けされたという記事はない。一方、『まさりくさ』や、その他、寛文期以前に成立した上方物評判記においては、空蟬の名が見当たらない。つまり、上巻に登場する空蟬は、吉原の他評判記との関連は見られず、さりとて新町にいた遊女の評判からの影響を考えることもできない。なのに、なぜこの段の遊女は「空蟬」の名が残されたのか。

理由はこの一段の内容にあるのではないだろうか。第四段の内容は、馴染みの愛人というほどではないにしろ、男が心をこめて通っていたのに、突然の身請けによって遊女を失うというものである。「空蟬」の名から想起される空虚なイメージが、宿や他の遊女をそのままに姿を消してしまったという内容に重ねることができる。上巻第四段において「空蟬」という名を引き出したものは、『伊勢物語』に表されている、かつての恋人がもう手の届かない存在になってしまったという男の喪失感であり、『伊勢物語』の情趣を活かすためにも、遊女の名は「空蟬」でなければならなかった。江戸の評判記として改変された際にも、この名は、パロディとして順当であ

ったこと、当時吉原に空蟬という名の遊女が在廓したことの二点を理由に、入木が施されなかったのだと考えられる。

このように第四段は、実際の遊女の姿を反映させているというよりも、『伊勢物語』の内容を活かすことを第一義として改変されている例だといえる。表2で空蟬と同じ項目に配した他三名の遊女も同様である。

次にあげるのは上巻第九段である。この段の遊女八橋は、次のような記述をもって登場する。

理右衛門の門に八はしといふ女郎いたりけり。其君を八はしといひけるは、水行川のくもでなれば、橋を八わたしたるといふ。その名所をとりてなんなづけける。

一見して、上巻のこの部分と、『伊勢物語』の相当箇所は同文に近いほどよく似ていることに気づくだろう。そして上巻においては、この箇所以外に八橋という遊女の行動や特徴は一切記されていない。第二十五段に登場する遊女あはぢの場合は、『伊勢物語』に「あはじともいはざりける女」という文が遊女名に読み替えられているだけである。第三十六段玉かづらの場合も、『伊勢物語』の歌に「玉かづら」の語句が用いられているのを、上巻においても、歌の中に遊女名を織り込むという形で残している。これは、もともと遊女の源氏名が歌語に通ずるものであったことを利用したパロディだと言えるだろう。

このように、「非入木」の項に配した「江戸の他評判記に名あり」の四名は、実際の遊女の姿よりも、『伊勢物語』の内容、または語彙を活かすことを優先させるという視点で、はじめ大坂物評判記の作者によって遊女名があてはめられ、江戸物に改変される際にも、その視点が残された例であると考えられる。

八　まとめ

以上、上巻の本文を引用しながら、表2の分類に沿って検討してきた。結果、明らかになったのは、上巻には入木の施された遊女名と入木でない遊女名が混在しており、延宝期当時の吉原遊女の名寄せとして全幅の信頼をおけるものではないということである。入木によって吉原遊女の実態を写し出そうと努めている段とともに、入木が施されずに大坂新町現在のままである段、一段の内容や語彙を重視してそれに合わせてあてはめられた遊女名をそのまま用いている段など、現実の吉原の姿を伝えようという意識が希薄なものもある。江戸物への改変にあたり、統一された意識が全段にわたって貫かれたわけではなかったのである。これらのことは、遊女評判記が実用に役立てるためにのみ読まれたわけではなかったことを如実に示している。

江戸物への改変の段階でこの作品に関与した作者は、二十七箇所の遊女名それぞれに対して入木を施すか施さないかを選択した。この選択によって、上巻の各段は、吉原遊女の実態を写しだそうとする意識のうかがえるものや、一段の内容を重視しようとする意識のうかがえるものなど、さまざまな意識をもった段に分けられることになった。江戸物に改変した作者にとって、入木という方法が江戸物評判記として作り上げるための主要な手段であったのと同様に、作品の内容を重んじて、あえて遊女名に手を加えないことも、作者の採った積極的な方法といえるのかもしれない。

ただし、比較対照すべき他評判記そのものが少なく、また大坂物評判記であった改竄前の『をかし男』も伝わっていないために、江戸物に改竄した作者の意図がまだ十分には明らかになっていないことも事実である。テキスト、周辺資料ともに、現在私たちが見ることのできる資料で証明できる事柄には限界があり、解明できない事柄も依然として存在し続けるだろう。また、文学史上どのように位置づけられるかという問題についても、他の評判記だけでなく同時代の他分野の文芸をも含めての検討が必要となる。ここでは問題点を指摘するにとどめるが、これらはこれからの遊女評判記の研究を展望する上での課題といえよう。

今後、『吉原伊勢物語』だけでなく、寛文・延宝期の遊女評判記のそれぞれについて、「何が書かれているのか」ではなく、「どう書かれているか」という点に着目して検討し、浮世草子成立以前において、遊女評判記とは読者にどのように受け入れられた文芸だったのかを明らかにしていきたい。

注1　市古貞次・野間光辰氏編『鑑賞日本古典文学第二十六巻　御伽草子』（角川書店、昭和五十一年）において野間氏は『仁勢物語』と、『吉原伊勢物語』と改題する以前の『をかし男』を比較し、「しかしそれらのもじりは、『仁勢物語』の無理こじつけに陥らず、軽妙にして機知に富んだもじりとは比較すべくもない。所詮模倣に過ぎないのである。」と解説している。パロディ作品としての評価を述べたものである。

2　小野晋氏「初期遊女評判記年表」（『初期遊女評判記集　研究篇』〈古典文庫、昭和四十年〉所収）、「天理図書館善本叢書和書之部第十一集　遊女評判記集」（同編集委員会編、八木書店、昭和四十八年）野間光辰氏解題の年表による。

3　石川巌氏編『吉原伊勢物語』（珍書保存会、大正八年）。

4　注3所掲書表紙見返しの解題による。ただし実際には、上巻は下巻と同じ版木を用いて部分的な入木を施したものであるので、石川氏の「原刻本」「再刻本」という言は正確ではない。

5　慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『斯道文庫書誌叢刊一　江戸時代書林出版目録集成』（井上書房、昭和三十七年）による。

6　注2前掲の各年表において、『吉原伊勢物語』上巻の刊行を、小野氏は「寛文末延宝初年」としており、野間氏は「延宝初年」としている。

7　小野晋氏編『近世初期遊女評判記集　本文篇』（古典文庫、昭和四十年）を使用。以下本文引用はすべて同書による。

8　早稲田大学附属図書館蔵本の本文を使用。

9　注7に同じ。

10　中村幸彦・日野龍夫氏編『新編稀書複製会叢書　第二十六巻』（臨川書店、平成二年）を使用。

11　大阪大学附属図書館蔵本の国文学研究資料館マイクロフィルムを使用。

12　石川巌氏編『吉原袖かゞみ』（珍書保存会、大正八年）を使用。以下本文引用はすべて同書による。

13　注10に同じ。

14　近世文学書誌研究会編『近世文芸資料類従仮名草子編㉟　遊女評判記集（中）』（勉誠社、昭和五十三年）を使用。

15　以下『色道大鏡』の引用は、野間光辰氏編『完本　色道大鏡』（友山文庫、昭和三十六年）による。

付記

本稿は二〇〇〇年度広島大学国語国文学会春季研究集会における口頭発表に加筆したものである。席上種々ご教示下さった諸先生方、また資料の閲覧と使用をご許可下さいました天理図書館に厚く御礼申し上げます。

――まつうら・けいこ、本学大学院博士課程後期在学――